



第218号

発行所

一般社団法人 芝蘭会
京都大学医学部同窓会

〒606-8315
京都市左京区吉田近衛町
TEL 075-751-2713
FAX 075-752-4015
E-mail: info@shirankai.or.jp
http://www.shirankai.or.jp

主な内容

- ② 新任あいさつ／退任あいさつ
- ③ 校友会・KMSI-FUNDだより
- ④ 退任あいさつ
- ⑤ 特別寄稿
- ⑥ 支部だより「滋賀」「香川」「島根」
- ⑧ 人事異動・会員計報

2024年4月1日、私は総合臨床教育・研修センターの准教授として京都大学医学部附属病院に着任しました。ちょうど大学構内を歩く新入生の姿が目に見えて、自分自身がまるで新たな学びの場と入学したかのよう、桜の舞と共に心踊るような気持ちでした。

「良い教育とはなにか」を問う、視点と視座、柔軟な視野

私はこれまでタイのマヒドール大学、米国のハーバード大学、ミシガン大学、そして国内では湘南鎌倉総合病院、島根大学と異なる環境で学び、また教育に携わってきました。その経験を通じて、医学教育においては特に相対比較の重要性や、視点・視野・視座を適切に調整することの大切さを強く認識するようになりました。さまざまな国で教育を受けるうちに、「良い教育とは何か」という問いに対し、万人に共通する普遍的な答えは存在しないのではないかと考えます。若い頃は、その答えが見つからないまま医学教育の現場に携わることに苦悩していましたが、ある時、たとえ絶対的な正解がなくとも、ミクロレベル (Micro system level) では学習者中心の原則に基づき、学習者の課題を診断 (評価) し、治療 (サポートと介入) することが重要であることに気づきました。また、病院や大学といったマクロレベル (Macro system level) においても、本質的には変わらず、施設全体の課題を診断し、適切に介入することが求められるのだと認識するよう

京都大学医学部 附属病院における 臨床研修改革への挑戦



京都大学医学部附属病院
総合臨床教育・研修センター
准教授
和足孝之

になりました。

「良い教育とは何か」を考え

る際には、他の施設や大学医学部、さらには国レベルで比較を行い、それぞれの長所や短所を踏まえながら課題を見つめることが有益ではないかと考えます。実際、大規模な組織においては、個々の部門の視点では優れた取り組みが、病院全体や大学全体としての視点で見ると必ずしも最適ではないことも少なくありません。その逆もまた然りです。重要なのは、視点と視座、さらには視野を柔軟に変えながら全体を俯瞰し、学習者にとって、そして組織全体にとって最適なバランスを見出すことだと考えています。

卒後臨床教育分野を牽引する
京大の役割とビジョン

さて、私は京大病院内のシステムや手順はおろか、事実として右や左すらわかっていない状態からのスタートでしたが、この12か月を通して、どのようにすれば臨床教育・研修センターが病院全体や大学全体にさらに貢献できるのかを模索してきました。本稿では、我が国の状況下における本院の現状と課題を基に述べたいと思います。

は国際的なネットワークを活かし、海外の優れた医療機関と連携しながら研修機会を提供できることも強みの一つと考えます。さらに、学際的な研究環境が整っていますから、臨床と研究の両面から早い段階で専門性の高いキャリアを築きたいと考える研修医にとっては、まさに理想的な場所だと思っています。

一方で、課題もあります。厚生労働省が定める基本的臨床能力 (知識・技術・態度) を研修期間のアウトカムとして設定する場合においては、「臨床研修に必要なコモンディーズや基本的な手技の経験が十分に積めない」と研修医が感じてしまうという事実です。細分化された高度専門

医療を中心とした学習環境では、研修医が主体的に関与できる場面が制限されるため、これは本院のみならず全ての大学病院で避けられないトレード・オフでもあります。

昨今の研修医の志向は変化し、実践的かつ一般的な臨床経験をより重視する傾向が強まると共に、Z世代を象徴するようなタイプ・コスパ志向の研修内容が人気となる雰囲気もあります。実際に都市部を中心とした研修病院では、研修医の負担軽減、給与待遇の改善、研修環境整備等の充実化が進んでおり、「京大ブランド」が若い世代に通じにくくなっている可能性があります。

このような課題がある中で、どうすれば本学・本院・当センターが卒後臨床教育分野で我が国の模範として牽引できるのか、どのような役割とビジョンを定めて院内で着実に貢献するのか、目下最大の課題と考えております。

シミュレーションセンターを
活用し、教育体制を再構築

現在、我が国では働き方改革の中で臨床研修の再編が進んでおり、本院にとっても限られた時間の中で新たな教育体制を再構築する必要性に迫られています。一人当たりのコモンディーズの症例経験不足、一般的な手技や処置のトレーニングに対しては、現在リニューアル中のシミュレーションセンターでのOff the job trainingが効果を発揮すると考えております。

当センターでは2025年

4月より、新しくバーチャルシミュレーターを用いた臨床推論治療学の学習も可能となりました。容易に学ぶ機会がない新生児心臓超音波シミュレーターやチームダイナミクス等の省察を行える「ふりかえ郎」等も導入されています。このようにデジタル技術やAIを活用したシミュレーション教育の活用や、オンライン研修の充実化を進めてきました。

連携の強化と差別化、
教育文化とシステムの再評価

次に我々の課題に対応するために、まず研修プログラムの多様化と実践的な教育の強化に努めることを考えました。2024年は京都圏域の医療機関のみならず、これまで縁が乏しかった日本各地の名高い研修病院 (八戸、水戸、利根、福島岐阜、宮崎等) と連携を強化し、より幅広い臨床経験を提供する

ことで、研修プログラムの魅力を高めることに取り組みました。さらには、他の病院との差別化を図るため、全国的にも珍しい米国での臨床留学プログラムの準備を進めました。米国での研修は、国境を超えるために高い障壁がありました。センターのスタッフ、院内総務課和進会様、芝蘭会の皆様のご支援のおかげで、2025年には2名の研修医をミシガン大学に派遣できることになりました。

2026年からはコラド大学も留学先として追加する予定です。また、本院の研修の魅力をより多くの人に知ってもらうため、京都府地域医療支援センターと協働し、学内外で活用可能な臨床教育コンテンツを積極的に発信することも開始しました。こうした取り組みはもちろん外向きのものではありませんが、それ以上に重要なのはむしろ、本院の教育文化と教育システム

の再評価だと考えています。また、本院の指導医たちは、多忙な診療業務の合間を縫いながら献身的に教育に携わってくれています。その姿勢を正しく認識し、教育の貢献が適切に評価される仕組みを整えることが不可欠です。

最後になりますが、1年かけて取り組んだ課題の抽出と原因分析を通じて、本院の臨床研修には無限の可能性があると確信しました。我々には京都大学としての歴史、優れた指導医、最先端の医療環境、豊かな研究資源といった、他にはない強みがあります。それらを最大限に活かしながら、より柔軟で魅力的な研修プログラムを構築するために、診療科や部門の垣根を超え、縦・横・斜めのコラボレーションを引き続き推進してまいります。



新緑に映える「基礎医学記念講堂・医学部資料館 (旧解剖学講堂)」

新任あいさつ

世界水準の診療・研究から
治る脳神経内科の実践へ



京都大学大学院医学研究科
脳病態生理学講座
臨床神経学 教授
松本理器

2024年10月1日付けで、
京都大学大学院医学研究科脳病
態生理学講座 臨床神経学分野の
教授を拝命しました松本理器と
申します。着任にあたりご挨拶
をさせていただきます。
私は奈良県出身で、1994
年に京都大学医学部医学科を卒
業し、第2代木村淳教授主宰の

床研修の後、柴崎浩教授（当
時）が主宰される京都大学大
学院医学研究科脳病態生理学
講座 臨床脳生理学教室（現在
の脳機能総合研究センター）に
1998年に入学しました。電
気生理と神経画像を駆使して学
際的なヒトのシステム脳科学研究
が推進できる世界有数の環境で
皮質脳波・脳磁図の手法を用い
て、脳のネットワーク構造を介し
て発作が出現するてんかんを表
裏体の高次運動機能の生理研究
に従事し、ヒトの外側運動前野
における運動関連の機能分化の
解明で学位を取得しました。
2000年夏から北米クリ
ブランドクリニック神経内科で
かん・臨床神経生理部門にクリ
ニカルフェローとして2年間留学
し、世界最高水準でサブスペシ
アリティである臨床神経生理学・
てんかんの研究を積み重ねるこ
とができ、研究面では低侵襲の脳
ネットワーク解析手法を開発する
機会に恵まれました。てんかんや
脳腫瘍の脳外科手術のために頭

蓋内電極を留置して術前検査を
行う患者に限られますが、頭蓋
内電極から微小電流で大脳皮質
を刺激し、皮質間結合を介して
伝播する電気活動を皮質・皮
質間誘発電位（cortico-cortical
evoked potential: CCEP）とし
て脳表から記録し、ヒト脳内の
因果的な皮質間結合を電氣的
に追跡する手法です。臨床的に
は個々の患者脳で脳機能・てんか
んネットワークが探索でき、シス
テム脳科学の観点からはグルー
プ解析により、非侵襲的計測の参
照地図となるヒト脳コネクトーム
の作成が可能で、世界各地で臨
床システム脳科学研究に応用さ
れています。帰国後も、*What
can we do for the current and
future patients using the state-
of-the-art neuroscience?* を常に
考え、国内外の研究者と異分野
共創研究を推進し、①言語など
高次脳機能ネットワークと病態下
の機能可塑性の解明、②低侵襲
の臨床脳機能マッピング法の研究
開発、③てんかんネットワーク病

態の解明を行い、研究成果の臨
床応用・普及を推進してきまし
た。2018年から神戸大学大
学院医学研究科脳神経内科学分
野に教授として着任し、5年10
ヶ月教室を主宰する機会をいた
だきました。専門のシステム脳生
理研究での日仏共同研究に加え
、学内外の融合研究や産学官連
携での超小型脳波計の研究開発
を展開する機会に恵まれました。
認知症の超早期病態での免疫系・
シナプス変容（神経過興奮病態）
に注目し、培養・動物モデルから
未病マウスまで、未病期の病態
マーカーの開発、治療介入に向け
た融合研究を進めています。
母校の臨床神経学教室を離
れ、外から眺めて再認識しまし
たのが、40年を超える歴史と
500名を超える多彩な同門
の存在です。第4代高橋良輔
教授のもと、診療面では「治る
脳神経内科」を標榜し脳神経
診療の総合パートナーとして幅広
く診療を展開し、研究面では
臨床神経科学研究の拠点とし

て基礎研究・iPS研究からヒ
トを対象とした神経生理・画像
研究まで推進してきました。診
療と研究の両輪の持続的発展に
向けて、臨床神経科学の素養を
持った Effective Neurologists と
Physician Scientists の育成に努
めたいと思います。神経変性疾
患に対する疾患修飾薬も上市
が始まり、初代亀山正邦教授
以来の教室の伝統である「治る
脳神経内科」を本格的に実践
できる時代になりました。新た
な治療の展開として、専門分野
を活かし、関連診療科と協働で
細胞移植・深部脳刺激から非侵
襲的脳刺激・ニューロフィードバ
ックまで、内科・外科治療に次ぐ
第3の治療法としてニューロモ
デュレーション治療を展開でき
ればと存じます。臨床神経学教
室は2029年で創立50年を迎
えます。これからは教室員とと
もに、次の50年に向けた診療・
教育・研究体制の整備・深化に
尽力いたす所存です。何卒よろ
しくお願い申し上げます。

退任あいさつ

基礎研究の成果を臨床に
との思い出で挑んだ19年



京都大学
総合戦略本部 参与
特定教授
高橋良輔

令和6年3月31日をもっ
て、臨床神経学教授を定年退
職しました高橋良輔です。平
成17年1月に着任以来、19年
3か月の長きにわたり、浅学

非才の私が脳神経内科の診療・
研究・教育の重責を担うこと
ができましたのも、京都大学の
皆様、また芝蘭会の先生方の
温かいご指導ご支援あつてのこ

とと、深く感謝申し上げます。
誠にありがとうございます。
私は卒後6年目に、神経難
病の原因解明のために基礎研究
を本務とすることを決意し、そ
の後15年間は基礎研究に専念
し、前職は和光市にある理化学
研究所脳科学総合研究センタ
ーのチームリーダー（研究室主任）
でした。そのような経歴であり
ながら臨床神経学教授に選任
していただいたのは、基礎研究の
成果を臨床に生かしたいという
熱意を買っていただいたからで
はないかと勝手に考えております。
私が京都大学で目指したこと
はまず人材の育成です。脳神
経内科は難病が多く、かつては
「わからない、なおらない、でも
あきらめない」の三「ない」科
だと言われていました。「あき
らめない」の大切さはずっと変
わりませんが、「わからない、な

おらない」は研究の進歩によっ
てきつと克服できると信じ、脳
神経内科専門医の実力を身に
つけながら、研究の訓練も受
け、探求心を持ち続けること
ができるフィジシャンサイエン
ティストの育成に力を入れました。
そのために必要な、関連病
院での臨床研修の後に大学
院で研究に従事するプログラ
ムが、同門会関連施設の絶
大なご協力で実現しました。
私の在任中は入局者総計
257名で、167名が大学
院に入学し、学位取得者は
121名に上ります。これは
大学だけでなく、同門会関連
施設の先生方が熱心に若手医
師を勧誘し、かつ臨床研修の
のちに大学院入学を勧めてい
ただいたおかげで、この場を借
りて厚く御礼申し上げます。
一万、臨床のさらなる充実も

重要な課題でした。脳神経内
科は病気の種類が極めて多く、
またコモンディージーズから稀少
疾患まで多様性に富んでいます。
それらに対応できなければ、神
経疾患診療最後の砦である大学
病院の使命は果たせません。そ
のため、あらゆる機会をとらえ
て外部資金を獲得し、また人
間健康科学系専攻やiPS研
究所をはじめとする学内関連
施設・講座に在籍する医師にも
協力いただき、なるべく多くの
専門医が大学病院の診療に参
加できるように努めました。そ
の結果、30名前後の助教クラス
以上の様々な専門性を備えたス
タッフが診療に従事するよう
になり、京大脳神経内科の学内
外の高い期待に応えられる体制
が構築できたと考えております。
研究面は、上記の若手人材
育成とリンクして多方面で成果

が開花しています。私の専門で
あるパーキンソン病（PD）では、
世界的に評価されるモデル動物
を樹立し、超早期診断法や治
療法にトランスレーションでき
るような成果がうまれつつあり
ます。またごく最近、CIRAの
高橋淳教授が開発された技術
をもとに、2018年に京大病
院で開始されたPDのiPS
細胞由来ドパミン細胞移植の医
師主導治療の結果がネイチャー
誌に掲載されました。なお、定
年退職後は、京都大学総合研
究推進本部参与・特定教授に
任命していただき、研究支援お
よび研究の仕事に引き続き携わ
れることになりました。
私自身、若手の助けになるこ
とを心掛けつつ、今後も神経疾
患の克服をめざし、あきらめず
努力を続けていく所存です。

芝蘭会館別館 併設
「SHIRAN CAFE」をご利用ください
シランカフェ

なつかしいキャンパスのそばで、
同窓会、懇親会、
忘年会はいかがですか？
メニューなど詳細は
こちら↓↓

76回・2024（令和6）年版
「芝蘭会会員名簿」を刊行しました！

この度、令和6年11月末に「芝蘭会会員名簿」を刊行いたしました。名簿
作成にあたり、会員の皆様から快く異動情報等をお寄せいただき、感謝申し
上げます。会員名簿をご希望の方は芝蘭会事務局まで お問い合わせください。

- 会員名簿：A4判、909頁
- 会員頒布代：1部 5,500円（消費税を含む）
※但し、会費納入者に限る。その他は 11,000円（税込）
- 送料：900円

芝蘭会事務局 TEL 075-751-2713 / FAX 075-752-4015

京都大学医学部
校友会・教育研究支援基金
(KMS-FUND) だより

〒606-8501
京都市左京区吉田近衛町
京都大学医学研究科事務部
TEL 075-753-4322
FAX 075-752-1528
Mail-Address:
kyoto-kms-fund@office.
med.kyoto-u.ac.jp

感受性をしなやかに

生命科学者として歌人として



KMS-FUND 委員長(2024年)
画像診断学・核医学 教授
中本裕士

令和6年9月28日(土)、京

都大学医学部構内の芝蘭会館本館において、京都大学医学部校友会第17回総会・講演会が現地およびオンライン配信のハイブリッド形式で開催されました。

前半の総会では、藤原真治校友会会長のご挨拶、伊佐正医学研究科長・医学部長による京都大学医学研究科・医学部創立125周年記念事業の説明とご挨拶がありました。

その後、京都大学医学部若手研究者優秀論文賞(KMYIA)の表彰式が行われました。

KMYIAは、平成21年に始まった京都大学医学部教育研究支援基金(KMS-FUND)による支援事業の一環で、京都大学医学部に所属する大学院生や研究生などを対象に、非教員を筆頭者とする優秀論文を表彰する制度です。今年度は、精神科神経科の平田りさ氏、呼吸器内科学の白石祐介氏、形態形成機構学の黒澤凌氏の3名(所属は論文掲載時のもの)が選出され、伊佐研究科長より表彰状と副賞(20万円)の目録が授与されました。

続いて、京都大学医学部校友会賞の表彰式が行われ、サッカー部、ラグビー部、茶道部が選ばれ、校友会会長より表彰状と副賞が

贈呈されました。

後半の講演会では、より多様な分野における話題を提供するため、昨年までの2名から増やし、今年は医学研究科教授4名による研究領域に関する講演、その後の特別講演という構成で行われました。

基礎研究分野からは、医療疫学の山本洋介教授が「Quality of Life—あなたの感じる健康状態を測定・評価する」、分子腫瘍学の藤田恭之教授が「正常細胞と変異細胞間に生じる細胞競合」について、それぞれの研究内容を交えた講演を行いました。

臨床分野からは、臨床病態検査学の長尾美紀教授が「高齢化社会の感染症対策を考える」をテーマに、続いて私(画像診断学・核医学)が「AIの進歩と画像診断」と題して講演いたしました。

今年の特別講演には、J-T生命誌研究館館長であり、京都大学名誉教授および京都産業大学名誉教授の永田和宏先生をお迎えし、「感受性をしなやかに——生命科学者として歌人として」と題して講演いただきました。

永田先生は、細胞生物学の



永田和宏名誉教授

このようにして、第17回医学部校友会総会・講演会、現役学生を含む100名

令和4年京都大学医学部若手研究者優秀論文賞 KMYIA 受賞者

	氏名	論文投稿時の身分	論文題目	掲載誌
臨床研究	平田 りさ	京都大学医学部 附属病院 (精神科神経科) 医員	Differences between subclinical attention-deficit/hyperactivity and autistic traits in default mode, salience, and frontoparietal network connectivities in young adult Japanese	onlinedoi:1038/s41598-023-47034-72023.12.13
	白石 祐介	医学専攻(呼吸器内科学) 博士課程4回生	Stronger Associations of Centrilobular Than Paraseptal Emphysema With Longitudinal Changes in Diffusing Capacity and Mortality in COPD	CHEST
基礎研究	黒澤 凌	医科学専攻(形態形成機構学) 博士後期2回生	PDIVAS: Pathogenicity predictor for Deep-Intronic Variants causing Aberrant Splicing	BMC Genomics

以上の参加者により盛況のうちに終了しました。企画・運営に尽力された校友会の皆様、ご参加いただいた皆様に深く感謝申し上げますとともに、芝蘭会の皆様には引き続きご支援をお願い申し上げます。

若手研究者優秀論文賞 KMYIA 受賞者の言葉



京都大学医学部附属病院
(神経科) 医員 (論文発表時)
平田りさ

このたび、京都大学医学部若手研究者優秀論文賞(KMYIA)を受賞する栄誉を賜り、大変光栄に存じます。

本研究を遂行するにあたり、研究の方向性をご教示くださりご指導を賜りました村井俊哉教授、画像解析の基礎から論文投稿に至るまで長期にわたり細やかにご指導くださいました藤原広臨准教授、発達症の注意障害に関する臨床的事実や既存の脳科学的仮説についての深い見解を賜りました先端作業療法学講座 義村さや香准教授、発達症の特性に着目した画像解析を行い本研究の土台を築いてくださいました小林 啓先生、

解析手法や結果解釈について一からご指導くださいました安藝森央先生、柴田真美先生、宮城崇史先生、データ収集の段階から尽力いただきました総合臨床教育・研修センターの植野 司講師、ネットワーク解析に関する正確な知識をご教授くださいました附属脳機能総合研究センターの大石直也准教授に、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今回受賞対象になりました論文は、疾患閾値以下の注意欠如・多動症(ADHD)および自閉スペクトラム症(ASD)特性の注意機能に関わる神経基盤を解明することを目的とし

ました。ADHDとASDは共に注意障害をきたす発達症ですが、ADHDは持続的注意がASDは選択的注意が主に障害されていると考えられています。しかし、両者の注意機能に関する神経基盤を直接比較した研究はこれまでほとんどありませんでした。

本研究では、健康被験者61名を対象に、ADHDおよびASD特性を自記式質問紙で評価し、持続的注意の行動指標をContinuous Performance Test(CPT)で測定しました。また、安静時および注意関連課題であるoddball課題中に機能的MRIを撮像し、注意処理に関わる大規模脳ネットワーク(Default Mode Network: DMN, Frontoparietal Network: FPN, Salience Network: SN)の機能的結合性(functional connectivity, FC)をRegion of Interest (ROI) -to-

ROI解析で検討しました。結果として、第一に、ADHD傾向が高い方がCPTの成績が良く、診断閾値以下のADHD傾向は注意機能促進的に働く可能性が示唆されました。MRI解析では疾患研究で報告されていない課題時のSN-FPN間のFCの増加を認め、このFCの変化が注意機能の促進に寄与している可能性があると言えます。第二に、ASD傾向とADHD傾向では、それぞれ異なる大規模脳ネットワークのFCとの相関を認め、ADHDとASDの注意障害の性質が異なるという臨床的知見が裏付けられました。

今後は今回の受賞を励みに、より具体的な臨床応用の可能性を探り、医学の発展に貢献できるよう精進してまいります。最後になりましたが、教育研究支援基金にご寄付いただきました方々に心より感謝しますとともに、今後の校友会の益々のご発展を祈念いたします。

ラグビー部、サッカー部、茶道部
3団体に校友会賞



表彰式には受賞3団体の代表が参加した

医学部校友会は、高い目標を持ち部活動に真摯に取り組む医学部公認団体を応援・支援する

ことを目的として「医学部校友会賞」を設けています。今年度は、令和6年9月28日に開催された「第17回京都大学医学部校友会総会」にて「第11回医学部校友会賞の表彰式」を行いました。

今回は令和5年9月から令和6年8月までを対象として「課外活動報告書」を提出していたとき、校友会で議論を重ねた結果、ラグビー部、サッカー部、茶道部の3団体に授与することに決まりました。

ラグビー部は、今年度の西日本医科学学生総合体育大会(西医体)において、優勝という輝かしい成績を残しました。大阪大学と奈良県立医科大学との合同

チームということで、他校との交流という点も評価しました。

サッカー部は、同じく今年度の西医体において、参加44校中準優勝という素晴らしい成績を残され、四十数年ぶりという快挙を成し遂げました。新入生も増えたということで、今後の活躍にも期待し評価しました。

茶道部は、多くの茶会を開催し、他校との交流、地域社会との交流も盛んに行われました。

また、寺院での茶会や国際会議でのボランティア活動を行っていることや、日本文化の継承に貢献されていることを評価しました。

表彰式では、この3団体に校友会の藤原会長から賞状ならびに支援金5万円が贈られました。

「医学部校友会賞」の募集要項は、例年6月頃に発表しております。受賞団体の選定にあたりましては、各種競技大会やコ

第18回京都大学医学部校友会
総会・講演会のお知らせ

日時 令和7年9月20日(土) 午後
場所 芝蘭会館本館 稲盛ホール
特別講演会
講演会終了後、懇親会・パーティー
申し込み受け付けは おって連絡いたします。

いました。これでは休養どころではありませんでした。

大学の研究室では、これらの機械器具を用いているんな研究がなされていた。詳しいことは私には分かりませんが、使用した器械器具は、当時は既製品はなく、全て自分自身で苦労して作成した物だそうです。出来上があれば半ば実験が成功したことになります。このようにして為された色んな分野の研究は学会に発表されました。心電図、脈波、心音図など、循環器系の機能を見る検査です。これらは後ほど父が学士院賞を受賞した原動力となりました。

あるとき父は「俺はこれから大きな仕事をやるので家にも机が要る」と言い出しました。私は直ぐ、大学での仕事では追いつかなくなったのだと思いついた。1階の広間に机を置いて仕事を始めました。この時から父は日本循環器学会の創設に取り掛かったのだらうと思えます。その後の仕事については専門的知識が無いので分かりませんが、最近、循環器学会の開会式で、循環器学会創始者としての父の写真がスクリーンに出されることがあると知り、当時の父を思い出して私は喜びを感じています。

◆戦中も往診に励む日々

昭和16年12月8日から太平洋戦争が始まったのですが、はじめの頃は私たちの生活にはあまり影響はなかったようです。私は絵を描くことが好きで、当時のアメリカ大統領ルーズベルトの似顔絵を描いて父に見せたら「敵の大將に似ているなんて言うたらあかん」と却下されました。しかし、日が経つにつれて生活の影響が次第に厳しくなってきました。先ず食料難です。配給米ではとても足りなくて、サツマイモ、雑炊を加えても家族の食料には不足します。そこで祖母はそつと男衆に頼んで闇

米を手に入れてもらって過ごしました。然しこれが父の知る所になり「俺に闇米を食べろというのか」と強く叱られました。食糧不足は人間だけの問題ではありませんでした。京都動物園にその影響が及びはじめました。動物に与える食料がないために先ず象が殺されました。次は猛獣です。空腹で暴れ出すといけないので阻止するためだそうでした。学校から電話してラジオで状況を聞いている父から「今日はライオンが殺された」と聞き、悲しくなって泣きました。猛獣は全て殺されました。また家で飼っていた2匹の犬も栄養失調で死にました。

さらに京都市に空襲警報が発令されるようになり、父はすぐに大学病院に行ってしまうので大きく掘った防空壕の中に、母と姉と私で祖母をそつと入れてあげました。また低空飛行でB29のマークの付いた飛行機が度々飛来し、ビラを撒きました。それには「花の京都は後回し」と書いてあったそうです。引っこりなしに鳴るサイレンに苛まれて生きた気持ちになれない毎日でした。

また戦時中として、若い医師は皆徴兵され、近所の人たちは診察を受ける医師がいなかった。そこで、父に往診を頼んできました。そこで夜中であっても病舎に行き、サンプルの薬を持って帰り、患者さんの治療をしました。それを聞いた人々が大量来るようになり、夜も昼もなく忙しくなり出したので、母が父の体を心配していった言葉に珍しく、母に怒ったことのない父が「医は仁なり」と言う言葉を知らぬのか」ときつい言葉で母を叱責しました。私はその場に居て感動しました。この「医は仁である」という概念はずつと父の中に生き続けていたのであろうと思います。

昭和20年になって、父は循環器病学に貢献した父の業績に對

して学士院賞が授与されました。皇居での授与式に参列し、天皇陛下に仕事に内容を説明したそうです。天皇陛下は「あつそう」と申されて、よく聞いて下されたそうです。

その後、終戦が近づいた頃、何かの作戦のため荒木貞夫陸軍大將が突然父の研究室を訪れ「航空医学の発展のために横須賀まで来て欲しい」と申し出て、心電図室で二人の記録写真を撮ったそうです。しかしすぐその後終戦日を迎え、約束が実行されることがなかったのです。そしてその約一か月後父の死を迎えました。

◆「医は仁なり」とヒボクラテスの誓い

そろそろ私の「優しかった父の思い出」も終わりに近づきましたが、最後に私が強調したいのは父は「初めから終いまで『医は仁である』ことを貫き通した」ことです。

「ヒボクラテスの誓い」から2千数百年たっていますが、現在の医療界にも通じる医の倫理即ち、患者さんの人権を守ること、安楽死の警告、患者に関する秘密を守ること、医師の墮落に対する警告などがこの誓いの中に織り込まれていることに驚きを感じます。このことはヒボクラテスの医師としての立派な人格とともに、医療界を取り巻く環境は昔も今も変わらないことを表しているかもしれない。そしてこれは「医は仁なり」にも通じると思います。

今の時代に父が生きていてくれているたらどんな人生を過ごしていたかと、私は想像するだけでも残念に思います。きつと時代の先端を張り切って進んだと思います。昭和の初めから数えて今年はいく年になる現代でも父は「医は仁なり」の精神でそれぞれの人を指導したと思っています。

支部だより

滋賀

長浜城を仰ぎ見る湖畔にて密度の高い講演を拝聴

令和6年11月2日（土）、長浜市北ビワコホテルグライエにて、令和6年度芝蘭会滋賀支部総会が開催されました。

はじめに総会が執り行われました。開会のご挨拶から始まり、支部長である笠原吉孝先生のご挨拶、物故会員の黙祷、会計報告、監事の中澤明先生による監査報告、予算案のご説明、役員改選、新たに滋賀支部に入会された小川修先生、武田佳久先生のご挨拶、次年度総会開催会場についてのご報告がありました。

続いて、京都大学大学院医学研究科科長の伊佐正先生による大学報告と学術講演が行われました。大学報告では「医学研究科・医学部の現況」と題し、がん免疫総合研究センター Bristol Myers Squibb棟の竣工、第5回京都大学ライフサイエンスショーケース@San Diego 2024の開催、ITMAT Kyoto University International Symposiumの開催、医学研究科附属のヘルスセキュリティセンターや医療DX教育研究センターの設置、クリニカルアナトミー（CAL）の充実、医学・生命科学研究支援機構（iSAL）の活動、京都大学医学研究科・医学部創立125周年記念事業、大学や大学院での教育改革の取り組みといった幅広い



内容が取り上げられていました。また、医学部教育研究支援資金（KMS-FUND）の取り組みとご協力をお願いについてもお話しがありました。

◆学術講演

続く学術講演では、「柔軟な意思決定の神経機構」について、最新の研究にも触れつつお話しされました。意思決定、特に複数の選択肢の中からどのような行動を選ぶかにおいて、ドパミン神経細胞が大きな役割を果たしていることが説明されました。中脳に位置するドパミン神経細胞、特に腹側被蓋野（VTA）は、線条体や前頭葉などの脳部位に投射し、複雑な脳回路を通じて意思決定に関与しているとのことでした。

このような脳の複雑な回路を特異的に操作する手段として、

いうモチベーション課題実験を行いました。すなわち、長く待つてたくさん報酬をもらう（HH: High effort-high return）か、短く待つて少ない報酬をもらう（LL: Low effort-low return）のどちらを選択するか、という実験です。通常の状態では、サルはより大きな報酬が期待できるHHを選ぶ傾向にある一方で、ドキシサイクリンを与えて腹側被蓋野から側坐核の経路を遮断した状態では、より簡単なLLを選択するようになることが確認されたとのことでした。

側坐核は、困難な課題に挑み学習しようとするモチベーションに関わっていて、アスリートの側坐核は大きいという報告もあることから、努力や忍耐の意思決定において重要な役割を担うと考えられているそうです。

また、腹側被蓋野から側坐核の経路は、その他の大脳基底核には側枝を出しているものの、前頭葉には投射していないことが分かっています。そのため、中脳から線条体や側坐核を含めた大脳基底核に行くドパミン経路と、中脳から前頭葉に行くドパミン経路とは別であり、前頭葉がどのように意思決定に関与しているかについても調べられました。

リスクと報酬のバランスに基づいた選択課題を行った結果、サルは、高リスク高リターン（HH）と低リスク低リターン（LL）のどちらを選ぶかという実験において、サルはHHで、より高い期待値を持つ選択肢を好む傾向がありました。一方で、前頭葉のArea 6Vとくう部位に抑制作用のあるGABAアゴニストのミシモルを投与した際には、リスクの依存性が消失することが明らかとなりました。

さらに、ドパミン神経活動を課題遂行中の特定のタイミングで操作するために、アデノ随伴ウイルス（AAV）に赤色の光で神経細胞を興奮させるChrimsonRを組み込んだもの

が用いられました。サルがまさしく意思決定を行うとするタイミングで、VTAからArea 6Vの腹側部に至る（6VV野）経路を光刺激することで、HH志向が強まることが確認されました。一方で、6VD野（より背側の領域）に至る経路刺激した場合には、HH志向は減弱したとのことでした。このことから、前頭葉のドパミン経路の調整が意思決定に影響を及ぼすことが示されたそうです。

また、VTAから前頭葉に向かう経路を繰り返し刺激することで、その効果が持続的に蓄積し、HH志向が高レベルで飽和する現象が観察されました。これは依存症のモデルとしても注目されている一方で、6VD野の経路を適切に刺激すれば、依存症の治療に応用できる可能性が示唆されました。しかし、刺激する部位や方法を誤ると逆効果になるリスクがあり、慎重な検討が必要とのことでした。

伊佐先生は、身近な具体例を交えながら、意思決定に関する神経機構について非常に興味深いお話をしてくださいました。会場の皆さんはその内容に引き込まれ、講演終了後には大きな拍手が送られました。伊佐先生、誠にありがとうございました。

◆特別講演

続いて、長浜市博物館館長・淡海歴史文化研究所所長の太田浩司先生により「豊臣（羽柴）秀長と近江―大河ドラマ『豊臣兄弟―』によせて」という題目で特別講演が行われました。

長浜市は過去4回も大河ドラマの舞台として取り上げられ、再来年の大河ドラマ「豊臣兄弟―」でも、主人公の一人である豊臣秀長と北近江が重要な舞台となります。秀長の側近であった小堀正次をはじめ、千利休や藤堂高虎など、多くの重要人物との関わりも描かれる予定です。特に、秀長周辺に育まれた文化や技術面にも注目が集まること

が予想されます。

天正2年以降、秀長は兄・秀吉が築いた長浜城に在城していたと考えられています。長浜市には秀長の初期の文書が複数残されており、特に木之本町黒田や同町古橋村の文書が重要な史料となっています。これらの文書からは、当時の秀長の活動や統治の様子を垣間見ることができます。

秀長は播磨・但馬攻めで大きな戦功を上げ、その証として長浜知善院の阿弥陀如来三尊像があります。これは播磨国書写山円教寺摩尼殿から持ち帰ったものとされています。その後、天正5年には「天空の城」として知られる但馬国竹田城、同8年には出石城の城代となり、天正11年の賤ヶ岳合戦では田上山城から前線を指揮し、大きな戦果を上げました。この合戦後、「長秀」から「秀長」と改名したとされています。

それ以前には、本能寺の変のあと、山崎の合戦での活躍により従五位下美濃守となり、賤ヶ岳合戦後は播磨国の支配を任せられました。天正13年には紀伊国根来・雑賀攻めでも戦功を上げ、紀伊国・和泉国を与えられました。さらに四国攻めでの功績により大和国も加増され、大和郡山城主として100万石を領することとなりました。現在も大和郡山には秀長時代の石垣や町割りが残されています。天正15年には九州攻めに参加し、従二位大納言となって「大和納言」と呼ばれるようになりましたが、朝鮮出兵前の天正19年、52歳という若さで大和郡山城にて死去しました。

秀長の重要な家臣として、筆頭宿老の小堀正次が特筆されます。正次は小堀遠州の父であり、姫路城の統治や大和郡山での政務を担当した優秀な側近でした。秀長没後は備中国松山城主となり、幕府にとって重要な鉄や紙の生産を管理しました。その手

腕は子の遠州正一にも引き継がれ、徳川幕府での活躍につながっていました。

秀長に関する資料は少なく、はっきりと分かっていることは少ないのですが、太田先生は、現存する古文書などの情報から秀長の生涯を読み解き、大河ドラマだけでは分からないような背景にある歴史について講演をしてくださいました。

*

今回、芝蘭会滋賀支部総会、伊佐先生による京大医学部医学科の現状のご報告と特別講演、そして太田先生による特別講演取材させていただきましたが、京大医学部医学科の現状とその取り組みや、意思決定にかかわ

香川

京都大学医学部附属病院の現状と将来の展望

令和6年11月16日(土)、香川県高松市のJ Rホテルクレメント高松にて、令和6年度芝蘭会香川支部総会が開催されました。会は支部長の門脇則光先生の進行のもと行われました。

まず初めに、「京都大学医学部附属病院の現状と将来の展望」という演題で、京都大学医学部附属病院院長の高折晃史先生による特別講演が行われました。病院の施設整備の進捗状況、高度急性期医療と先進医療の両立、CAR-T細胞療法などの新しい治療法の導入、そして病院経営の課題についてお話しくださいました。以下項目に分けて記載します。

施設整備の進捗状況

高折先生は、2013年のマスタープランに基づき、病院機能を東側に移行する計画を進めていることを説明されました。救命救急センターの拡張や高度急性期病棟の効率的な運用、オペ室やICUの増築・改築などにより、ケアユニット病床数



る「選択」という比較的馴染みのある話題に関する最新の研究成果、そして大河ドラマの舞台となる豊臣秀長の生涯に絡めた長浜市のお話など、どれも大変興味深い話題ばかりで、拝聴している時間があっという間ででした。伊佐先生、太田先生、ご講演誠にありがとうございました。支部長の笠原先生をはじめとして、多くの先生が芝蘭会滋賀支部を盛り上げようとご尽力されておられることに、学生ながら大変感銘を受けました。この度は芝蘭会滋賀支部の先生方におかれましては、このような会にお招き頂き誠にありがとうございました。(文責・4回生 反田武志)

を60床に増やしました。これにより、高度急性期医療をより充実させていきます。

高度急性期医療と地域医療の連携

京大病院は高度急性期医療と

先進医療の両立を目指しています。救命救急センターを整備しつつ、地域医療にも積極的に貢献しています。患者を地域の医師に返す「連携主治医制」を推進し、地域との連携を深めています。

先端医療研究とIPS細胞の活用
京大病院の先端医療研究開発機構(iACT)では、新薬や医療機器の開発を支援しています。特に、IPS細胞を用いた再生医療では、パーキンソン病、軟骨再生、血小板産生などで成果を上げています。

パーキンソン病では、IPS細胞から作成したドーパミン産生細胞を脳に移植する臨床試験が進行中です。また、血小板を必要とする患者に対し、患者自身のIPS細胞から血小板を作り、輸血する取り組みも行われています。

CAR-T細胞療法法の導入と成果
血液がん治療で注目されるCAR-T細胞療法では、患者のT細胞を遺伝子改変し、が

ん細胞を攻撃する治療を行っています。京大病院の治療成績は良好ですが、全国的に治療施設が50しかない現状が課題とされています。

病院経営と社会的貢献

国立大学病院全体が経営難に直面しており、京大病院も例外ではありません。持続可能な運営を目指し、救命救急センターの稼働や効率的な病床運用を進めています。また、小児がんなどの患者家族が利用できる「ドナルド・マクドナルド・ハウス」の建設計画を紹介し、寄付を募っています。高折先生は、京大大学創立125周年記念事業についても説明されました。

市民公開講座や記念式典の開催、外来化学療法室の拡張などが計画されています。

*

高折先生の特別講演後、写真撮影を行ってから、懇親会会場に移り、物故会員の黙祷ののち、門脇先生の進行のもと、決算、収支予算案、役員人事などについての協議がなされました。その後、高折先生による京大医学部の現状報告がありました。新任教授、退任教授や、学生会館に隣接する多目的施設の建設など、学内のトピックについて説明していただきました。

芝蘭会香川支部の先生方におかれましては、今回このような会にお招きいただき誠にありがとうございました。香川支部の先生方のご厚意により、会食をさせていただきました。大変美味なフランス料理をいただきましたが、興味深いお話を拝聴することができ、とても刺激的な時間を過ごすことができました。

最後になりましたが、このような素晴らしい会にお招きくださったことに最大限の感謝の意をもって、芝蘭会香川支部の報告を終わらせていただきます。

※「京都大学医学部附属病院将来構想2013」
(文責・3回生 奥村圭一郎)

島根

次世代へのバトンとなる低侵襲のロボット手術の可能性

令和6年11月23日(土)、ホテル武志山荘にて、令和6年度芝蘭会島根支部総会が開催されました。総会は大谷浩先生と坂本達則先生による司会のもと、開会の辞や議事進行が滞りなく行われました。

その後、京都大学消化管外科教授の小濱和貴先生をお招きし、大学講演と学術講演が行われました。大学講演では、「医学研究科・医学部の現況」をテーマに、がん免疫総合研究センターBristol Myers Squibb棟の竣工など、最新のトピックスが幅広く紹介されました。また、医学研究科附属のヘルスセキュリティセンターや医療DX教育研究センターの設置、クリニカルアナトミラボ(CAL)の充実、医学・生命科学研究支援機構(iSAL)の活動、さらには京大医学研究科・医学部創立125周年記念事業についても説明がありました。

さらに、大学や大学院での教育改革の取り組みや、医学部教育資金(KMSIFUND)の活動とご協力をお願いについても触れられました。

◆学術集會

続く学術講演では、「胃がん外科治療のいまこれから——次世代のバトン」をテーマに、小濱先生ご自身の経験や展望などが語られました。

小濱先生は平成7年に京都大学を卒業され、胃がんの低侵襲手術を中心に活躍されています。2010年には韓国の延世大学に留学し、世界に先駆けてロボット手術が行われていた現場で学ばれました。

当時、日本ではロボット手術の導入が進んでいなかった中で、延世大学での経験は貴重なものだったといえます。また、手術



室では英語が通じても、その他の場所では英語が通じず、韓国語を学びながら日々を過ごされたそうです。「言葉は使われないと忘れてしまうもの」としみじみ語られ、言葉の面白さを感じたエピソードも共有されました。

また、小濱先生は「人生では3回くらい風船が飛んでくる」とお話しされ、その風船をつかむことで新しい世界が開けるという信念をお持ちでした。延世大学での経験は、先生にとってその風船の一つだったとのこと

です。この経験を生かし、ロボット手術の普及に取り組み、全国各地の病院で導入支援を行ってきた背景が紹介されました。

さらに、今後の胃がん治療については、低侵襲のロボット手術の可能性に注目し、進行がんの対応や高齢化社会の適応を見据えた外科医の役割についても

語られました。胃がん手術では、術後合併症を最小限に抑え、次の治療に「つなげる」手術が重要であり、消化器内科や腫瘍内科との連携も欠かせないと強調されました。

ロボット手術に関してももちろん、利点と欠点があるそうです。利点としては、腹腔鏡手術の動作制限を克服したことや、術後合併症の減少などを具体的なデータをもちに示されました。

また、分業制である腹腔鏡手術に対してロボット手術は、①術者の両手を使い、多関節機能をフルに活躍できる、②スコップによって自由自在に見たい術野をブレずに映し出すことができる、③リトラクションアームによるブレのない大きな場を展開できる、という3点において一人三役であるとのことでした。

(次ページにつづく)

一方で、欠点としては、費用がかかること、ロボットアームが干渉すること、触覚がないことなどを挙げられました。現在、最も普及しているダヴィンチXiの他にも、国産ロボットのヒノトリをはじめ、シングルボットによつてアームが干渉しにくいダヴィンチSP、空気圧制御によつて力覚を直接感じることができるサロア、そしてヒューゴといったロボットを紹介されました。

さらに「次世代のバトン」として、外科医教育の重要性などについてもお話しされました。従来のような開腹→腹腔鏡→ロボットという流れは薄まっております、教育ツールが多く、手術教育に向いているロボットで若手を育成し、どんどん取り組ませていくべきだとお話しされました。また、京大医学部消化管外科では、学生がロボットを触ってみる場を企画したところ、大盛況を博したとのことでした。講演の内容に多くの参加者が引き込まれ、終了後には会場から大きな拍手が送られました。小湊先生、誠にありがとうございました。

その後の懇親会では、先生方と食卓を囲みながら、昔話や今後のキャリアに関するアドバイスをお聞かせいただくなど、貴重な時間を過ごすことができました。現在は内科を志望している私にとっては、外科医としての魅力や情熱に触れる貴重な機会となり、大変刺激を受けました。懇親会後の二次会では、さらに親睦を深め、歌や交流を楽しむやかなひとときを過ごしました。

最後になりますが、このような素晴らしい島根支部総会を企画・開催してくださった先生方、関係者の皆様に心より感謝申し上げます。学びと交流が充実した一日を振り返りつつ、芝蘭会のさらなる発展を祈念して報告を終わらせていただきます。
(文責・6 回生 小澤回陽)

人事異動

R7.1.31	木内 泰	辞任	神経・細胞薬理学准教授 ➡ 神経・細胞薬理学特定准教授
R7.1.31	伊達 洋至	辞任	呼吸器外科学教授 ➡ デューク大学心臓血管胸部外科教授
R7.1.31	亀田 隆範	辞任	眼科学講師 ➡ 小倉記念病院部長
R7.2.1	西川 佳孝	昇任	健康情報学助教 ➡ 同准教授
R7.2.1	村岡 勇貴	採用	眼科特定講師 ➡ 同講師
R7.2.1	増井 仁彦	昇任	泌尿器科助教 ➡ 同講師
R7.2.1	西谷 江平	昇任	整形外科助教 ➡ 同講師
R7.2.1	谷口 智憲	採用	がん免疫PDT研究講座（産学共同）特定講師 ➡ 免疫代謝研究講座（産学共同）特定准教授
R7.2.1	山崎 大	昇任	地域医療システム学講座（寄附）特定講師 ➡ 同特定准教授
R7.2.28	濱口 航介	辞任	生体情報科学准教授 ➡ 鹿児島大学大学院医歯学総合研究科教授
R7.3.1	山地 杏平	昇任	循環器内科助教 ➡ 同講師
R7.3.31	岩井 一宏	辞任	細胞機能制御学教授
R7.3.31	浅野 雅秀	辞任	附属動物実験施設教授 ➡ 同研究員（非常勤）
R7.3.31	原田 浩二	辞任	環境衛生学准教授 ➡ 京都府立大学教授
R7.3.31	高田 大輔	辞任	医療経済学特定講師 ➡ 同志社女子大学准教授
R7.3.31	白井 由紀	辞任	先端看護科学緩和ケア看護学准教授 ➡ 関西医科大学教授
R7.3.31	細川 陸也	辞任	先端看護科学地域健康創造看護学講師 ➡ 京都府立医科大学准教授
R7.3.31	大森 孝一	辞任	耳鼻咽喉科・頭頸部外科学教授 ➡ 頭頸部腫瘍先進治療学講座（寄附）・研究員（非常勤）
R7.3.31	松尾 武彦	辞任	心臓血管外科学講師 ➡ 小倉記念病院心臓血管外科部長
R7.3.31	黒田 隆	辞任	整形外科科学講師
R7.3.31	浅井 啓太	辞任	口腔外科学講師 ➡ 歯科医院副院長
R7.3.31	濱西 潤三	辞任	婦人科学・産科学准教授 ➡ 京都医療センター・産婦人科部長
R7.3.31	齊藤 亮一	辞任	泌尿器科学准教授 ➡ 兵庫医科大学准教授
R7.3.31	池田 義	辞任	心臓血管外科学准教授 ➡ 医学研究科講師（非常勤）
R7.3.31	中尾 一祐	辞任	口腔外科学准教授

R7.3.31	磯田 裕義	辞任	先制医療・生活習慣病研究センター特定教授
R7.3.31	濱口 清海	辞任	地域医療システム学講座（寄附）特定講師 ➡ 大阪赤十字病院部長
R7.3.31	佐々木 彰	辞任	総合臨床教育・研修センター特定講師 ➡ 福島県立医科大学准教授
R7.3.31	坂本 道治	辞任	形成外科特定准教授 ➡ 香川大学医学部形成外科学准教授
R7.4.1	久保 達彦	採用	広島大学大学院医学系研究科教授 ➡ ヘルスセキュリティセンター教授
R7.4.1	SEO,Wooseok	採用	名古屋大学大学院医学系研究科特任准教授 ➡ がん免疫総合研究センターがん免疫多細胞システム制御部門准教授
R7.4.1	松井 茂之	採用	名古屋大学大学院医学系研究科教授 ➡ 医療統計学教授
R7.4.1	松井 孝太	採用	名古屋大学大学院医学系研究科講師 ➡ 医療統計学准教授
R7.4.1	建内 宏重	昇任	先端リハビリテーション科学運動機能開発学准教授 ➡ 同教授
R7.4.1	林 和寛	昇任	人間健康教育研究若手人材育成プロジェクト助教 ➡ 先端リハビリテーション科学学生体構造学講師
R7.4.1	山下 正	採用	神戸市看護大学講師 ➡ 先端看護科学地域健康創造看護学准教授
R7.4.1	川島 啓嗣	採用	京都大学医学部附属病院助教 ➡ 先端リハビリテーション科学脳機能リハビリテーション学准教授
R7.4.1	島本 健	採用	浜松労災病院部長 ➡ 心臓血管外科学准教授
R7.4.1	神戸 直智	採用	皮膚科学特定教授 ➡ 同准教授
R7.4.1	山口 昭彦	採用	京都市医連中央病院歯科口腔外科科長 ➡ 口腔外科学講師
R7.4.1	三宅 可奈江	採用	高度医用画像学講座（産学共同）特定講師 ➡ 画像診断学・核医学講師
R7.4.1	渡邊 拓磨	昇任	歯科口腔外科助教 ➡ 同講師
R7.4.1	川本 修司	昇任	集中治療部助教 ➡ 麻酔科学講師
R7.4.1	COPPO,Roberto	採用	クリニカルバイオリソース研究開発講座（産学共同）研究員（非常勤） ➡ 同特定准教授
R7.4.1	大西 弘恵	昇任	地域医療システム学講座（寄附）特定助教 ➡ 同特定講師
R7.4.1	片岡 正子	採用	放射線診断科講師 ➡ 先制医療・生活習慣病研究センター特定教授
R7.4.1	木村 公俊	採用	脳神経内科特定講師 ➡ 多系統萎縮症治療学講座（寄附）特定講師
R7.4.16	古結 敦士	採用	大阪大学大学院医学系研究科助教 ➡ 医療倫理学講師

会員計報

謹んでご冥福をお祈りいたします			日付はご逝去日		
石坂 為久	昭和 19 年卒	令和 7 年 5 月 7 日	桂 義和	昭和 30 年棄卒	令和 6 年 8 月
安部 達義	昭和 20 年卒	令和 7 年 3 月 15 日	宮野 茂子	昭和 30 年棄卒	令和 7 年 1 月 24 日
岩井 和郎	昭和 24 年卒	令和 6 年 11 月 7 日	池田 正之	昭和 32 年卒	令和 7 年 2 月 28 日
安田 博幸	昭和 25 年棄卒	令和 5 年	児玉 義人	昭和 33 年棄卒	令和 6 年 12 月 15 日
藤田 隼夫	昭和 26 年専卒	令和 7 年 2 月 28 日	今村 貞夫	昭和 34 年卒	令和 7 年 3 月 24 日
杉山 陽一	昭和 27 年卒	令和 7 年 2 月 12 日	富永 紳介	昭和 34 年卒	令和 4 年 9 月
岡林 一蔵	昭和 27 年棄卒	令和 4 年 5 月 19 日	寺浦 哲昭	昭和 35 年卒	令和 7 年 1 月 9 日
小柴 琢磨	昭和 28 年卒	令和 7 年 2 月 3 日	仲野 良介	昭和 35 年卒	令和 7 年 1 月 5 日
片岡 宏	昭和 28 年棄卒	令和 7 年 4 月 4 日	奥野 勝之	昭和 36 年棄卒	令和 7 年 2 月 1 日
山口 延男	昭和 30 年卒	令和 7 年 1 月 28 日	苧坂 邦彦	昭和 37 年卒	令和 7 年 3 月 3 日
河村 悌夫	昭和 37 年卒	令和 7 年 1 月 25 日			
藤森 克彦	昭和 37 年卒	令和 6 年 11 月			
高島 秀行	昭和 37 年院卒	令和 7 年 1 月 29 日			
竹上 貞之	昭和 39 年卒	令和 7 年 3 月 17 日			
太田 和夫	昭和 40 年卒	令和 7 年 2 月 8 日			
久野 薫	昭和 41 年卒	令和 6 年 12 月 12 日			
藤村 弘	昭和 41 年卒	令和 4 年 11 月			
小林 武郎	昭和 43 年卒	令和 7 年 4 月 21 日			
朝香 文雄	昭和 51 年卒	令和 5 年 9 月 9 日			
尾崎 承一	昭和 51 年卒	令和 6 年 9 月			

「なりすまし電話」にご注意ください

最近、芝蘭会員の方々へ芝蘭会員または京大医学部事務職員の名前をかたって、個人情報（住所、電話番号等）を聞き出そうとする不審な問い合わせの電話があるということを会員の方からご連絡をいただいております。芝蘭会とは全く関係がございません

ので、くれぐれもご注意くださいますようお願いいたします。
なお、芝蘭会では会員の方から住所変更等のご連絡がない限り、事務局からはお問い合わせはいたしておりません。ご不審なことがありましたら、芝蘭会事務局までご連絡ください。

芝蘭会事務局 TEL ● 075-751-2713 FAX ● 075-752-4015

事務局から

平成17年4月からの「個人情報保護法」の全面施行により、個人情報の取り扱いに厳しい制約が課せられました。つきましては、会員の連絡先等のお問い合わせは、必要理由等を明記の上、郵便またはFAXにより事務局までご送付ください。電話でのお問い合わせにはお答え致しかねますので、ご了承ください。
FAX 075-752-4015

原稿募集

芝蘭会報は、会員の皆様の情報交換・意見発表の場であります。支部活動、クラス会、会員の著書の紹介（自薦・他薦）及び医学・医療等に関するご意見等を寄稿ください。なお、送付先はFAX(075-752-4015)またはE-mail (info@shinkankei.jp) をお願い致します。また、原稿の採用及び掲載時期については、編集委員会で決めさせていただきます。
芝蘭会報編集委員会

芝蘭会報編集委員会

委員長 森信曉雄
委員 中村保幸、吉岡秀幸、清川岳彦、園部誠、松村由美、甲斐亜沙子、諫田淳也

芝蘭会雑誌部

顧問 森信曉雄
部員

（5回生）反田武志、福田大智
（4回生）伊東和央、奥村圭一郎、木田雄大、周新陽、田中春輝、永山幹太、土屋亘正
（3回生）浅野優之助、石田匠、高木大聖、高柳翔太郎、中塚昌宏、三宅宏季
（2回生）木村淳、西野純平、萱島孝太郎、和田紗矢香、山本京一朗、堀坂俊輔、吉田蒼一郎、角谷昌

芝蘭会事務局

事務局長 山田均
管理課長 森勝二
総務課 秋山和美
制作協力 京都通信社